資料 1

生と死の教訓 未来へ

神の川 永遠に

イ病勝訴50年 ②

編集委員 宮田求

イタイイタイ病に認定された患者は200人。さらに、病を引き起こすカドミウムで汚染された富山市の農地は1686㌶（東京ドーム360個分）に達し、復元工事には32年の月日と407億円を費やした。

土壌復元や神通川の水質改善を機に、被害者団体と原因企業が「全面解決」で合意したのが2013年。最初の患者が出たとされる1911年から100年後のことだ。

克服までのあまりにも長い道のり。そこに刻まれているのは、死に勝るとも言われた患者の苦しみ、寄り添う家族の葛藤、人としての尊厳を懸けた闘いの歴史である。

私たちは、そんなイ病についてどれだけ知っているだろうか。伝えること、伝え続けることの意味は何だろうか。

風化させない

「皆さん、こんにちは。きょうは、私のおばあちゃんの話をします」

1月末、富山市友杉の県イタイイタイ病資料館の研修室。集まった同市奥田小学校5年生80人に、江添良作さん(71)＝同市任海＝が語り掛けた。児童と目線を合わせ、一つ一つの言葉は丁寧で柔らかい。

江添さんはイ病患者を祖母に持つ「語り部」だ。祖母は患者らが損害賠償を求めて争った50年前の訴訟に、原告の1人として加わったチヨさん。

「死にまさる苦しみからのがれるために…死のうと考えながら、それもできず…じっと泣いていた」。原告弁護団が最終準備書面で訴えた、患者の生き地獄を体現したのがチヨさんだった。

チヨさんは43歳のころ、足に針で突くような痛みが現れ、53歳から入退院を繰り返した。治療の効き目はなく、症状は悪化。「全身、体も足もない、もう削るように痛い」ほどの苦しみにさいなまれた。

入院が長期化する中、たまに家に帰っても「一服茶屋にいるようなもの」と、居場所がない感覚に襲われる。「いっそのこと、家の前の川に入ろうか。それとも農薬を飲もうか」。自らの命を絶つことすら考えた。しかし、「そんなことをすれば、家族に大変な迷惑をかけてしまう」と思い直した。気持ちは生と死の間を揺れ動く。外を眺めながら、涙に暮れた。

陳述を終え、富山地裁を出る江添チヨさん。右は介添えをする子、久明さん＝1970年8月

チヨさんは入院先からイ病訴訟の尋問に2回応じている。1970年8月は家族の介添えで、同年10月は担架で運ばれ、富山地裁の証言台に立った。裁判官と原告、被告両弁護団に向かって、絶望の淵に追い込まれた心中を率直に述べた。

この尋問の翌71年2月、チヨさんは67年間の生涯を閉じる。原告の一員として命を懸けて臨んだ裁判だったが、それから4カ月後に訪れる一審勝訴判決を見届けることはできなかった。

江添さんは祖母の生きざまを紹介していると、声が震え、涙声になる。イ病を語り継ぐ役目を担って5年になるが、語るうちに半世紀前の光景が浮かび、思いが込み上げる。

そんな江添さんが語り部になるきっかけは父、久明さんの手記だった。久明さんは法廷闘争や患者救済に奔走し、副会長としてイ病対策協議会を支えた。久明さんの遺品の中に229枚の原稿用紙があった。歩んできた人生とイ病への思いがびっしりと書き込まれていた。チヨさんが法廷で陳述した内容を記したくだりには「胸も破れるような気持ちでした」と、現場に立ち会った時の思いも添えられていた。

江添さん自身、裁判当時は学生で、傍聴したこともなければ、その後も強い関心を持ってこなかったという。だが、手記に目を通し、入院先へ着替えなどを届けた時のチヨさんの喜ぶ姿を思い浮かべた。さらに、その表情の裏にあった苦悩と、家族に降りかかった病の残酷さを強く意識した。

「このような過ちを二度と繰り返してはならない」。当時の思いが今も語り部としての江添さんを突き動かす。

患者の家庭を再現したジオラマを眺め、イ病の恐ろしさを学ぶ児童＝県イ病資料館

「皆さんにとって一番大切なものは何ですか？」

奥田小児童への講話の最後に江添さんが質問した。単に事実を知ってもらうだけでなく、教訓をくみ取ってもらうための、いつもの〝問い掛け〟だ。

「命です」。手を挙げて答えた女子児童に、江添さんはこう答えた。「私もそう思います。その命を支えとるのが、水と空気と土なんです」

祖母、父から「伝える」ことのバトンを受け取った江添さん。その講話から児童は命の尊さを感じ取る。子どもの感性とイ病の教訓が重なり合い、美しい古里を守る願いが過去から現在、そして未来へと引き継がれる。

（隔週日曜日掲載）

苦難に満ちた祖母の人生を、児童に語る江添良作さん＝県イタイイタイ病資料館

資料館 克服の歩み紹介

9年で入館24万8800人

イ病発生から克服までの歴史を伝承する県イタイイタイ病資料館は2012年にオープンし、9年になる。これまで約24万8800人が入館している。

入ってまず目に入るのが、患者がいる家庭や集落を再現したジオラマだ。カドミウムに汚染されたコメや水を摂取してイ病を発症した住民と家族の苦悩を、ドラマ仕立ての映像で紹介している。

別のモニター画面には、多くの患者を診療した萩野昇医師らが映し出され、苦悩をにじませた言葉の字幕が流れる。パネルや映像で勝訴までの歩み、汚染田復元の工法やプロセスも説明している。

語り部は、患者に寄り添った体験談を通じ、その苦しみや悲しみを、生々しく浮かび上がらせる役割を担う。現在のメンバーは10人。うち患者の家族が8人で、江添さんのようにイ病訴訟原告の孫世代が中心だ。学校や企業、老人クラブなど10人以上の各種団体の申し込みを受けて、講話を語る。原因企業の三井金属鉱業社員もほぼ毎年、受講している。